

国立国語研究所学術情報リポジトリ

独立語的な対称詞と指示詞系フィラーの使用実態：
日本語諸方言コーパスと大分県の談話資料を用いて

メタデータ	言語: 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-01-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 空 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000157

独立語的な対称詞と指示詞系フィラーの使用実態

——日本語諸方言コーパスと大分県の談話資料を用いて——

山本 空

近畿大学工業高等専門学校／国立国語研究所 共同研究員

要旨

国立国語研究所（編）（2001～2008）『全国方言データベース 日本のふるさとことば集成』（国書刊行会，以下『集成』）と「日本語諸方言コーパス（COJADS）」を用いて，独立語的な対称詞と指示詞系フィラー「アノ」「ソノ」の使用実態を地点ごとに比較・分析した。その結果，独立語的な対称詞を多用する地点の中で，指示詞系フィラーの使用が標準語的な使用と異なっている地点がみられた。特に大分県では指示詞系フィラーの使用が少なく，むしろ独立語的な対称詞が最も多く使用されていた。そこで大分県について談話資料を追加して調査したところ，やはり指示詞系フィラーよりも独立語的な対称詞を多用する地点が多いという結果になり，『集成』『COJADS』による大分県の調査結果と類似していた。大分県では対称詞がフィラーとして日常的に使用されていると考えられる。このように，独立語的な対称詞は単にその地点に存在するだけでなく，ほかのフィラーの使用にも影響を与えており，他方言では汎用的に用いられている指示詞系フィラー「アノ」の機能が制限されることが明らかになった。ただ，この傾向は年代が新しくなると薄れてきており，経年変化の可能性もあることも示唆された*。

キーワード：方言談話，対称詞，フィラー，『日本語諸方言コーパス』

1. はじめに

本稿では「日本語諸方言コーパス（COJADS）」と方言談話資料を用いて，(1) の用例¹にみられるような独立語的な対称詞と指示詞系フィラー「アノ」「ソノ」の使用実態を地点ごとに比較する。(1) は国立国語研究所（編）（2001～2008）『全国方言データベース 日本のふるさとことば集成』（国書刊行会，以下『集成』）に収録されている兵庫県相生市の談話の一部だが，方言談話にはこのような文中にかかり先のない独立語的な対称詞がみられることがある。筆者はこのような対称詞を「独立用法の対称詞」と呼んでいる。

- (1) A：ダエ ユーンカナ ソノー シキノ ウツリカワリヤトカ，（何 [と] いうのかね
その 四季の 移り変わりだとか，）
B：ハン ハン（はあ はあ）
A：ソヤナ カンジカ^oナ（そういう 感じがね）

* 本稿は博士論文（山本 2021a）の一部と日本語学会 2021 年春季大会での口頭発表（山本 2021b）に加筆・修正を加えたものです。なお，本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）の成果物です。また，本研究は JSPS 科研費 25284087，16H01933（研究代表者：木部暢子）の助成を受けています。

¹ 用例は読みやすさを考慮して表記，記号を一部変更している。また，下線，太字は筆者によるものである。

B: シ (うん)

A: マツリカ° キタテ キトンカトモ, (祭りが 来たって 来ているのかとも,)

B: シ ソーヤ (うん そうだ)

A: ソヤカラ モー ショーカ° ツガ キタツテ アンタ (だから もう 正月が 来たって あなた)

B: シー (うん)

A: ヒトツモ カンキョー ワカヘンカ° ナ モー. (ひとつも 感興 [が] わかないよもう.) (1985年兵庫県相生市の談話・70代男性 『集成』 13: 214)

筆者はこれまで、上記のような独立用法の対称詞について分析してきた。山本 (2014)・山本 (2016) では、独立用法の対称詞は西日本において使用されやすいことを述べた。そして独立用法の対称詞が出現するとき、(2) のようにその前後にフィラーが使用されていることがあることも山本 (2021a) で指摘した。

- (2) A: ホデ, ウワ マ イマー アンタ, (B フン フン) ソノ カイスイキ° ノ ハナシカ° デキタケド (B フン フン {咳}) ワシラモ ウミ イクー ユタラー アノ, ロクシャクフンドツシャ。(それで, うわ (= 言い淀み) ま 今, あなた, (B ふん ふん) その, 海水着の 話が出 [て] 来たけど (B ふん ふん {咳}) 私たちも 海 [へ] 行く [と] いったら あの, 六尺禪だ。)

(1985年兵庫県相生市の談話・70代男性 『集成』 13: 141)

本稿でいう独立用法の対称詞について大分県の談話を分析した松田 (2015, 2022) は、このような対称詞は「フィラー的に使用」されていると述べている。山本 (2014) でも独立用法の対称詞と、その周辺にあらわれる要素が発話のどの部分にあらわれるかを分析した結果、独立用法の対称詞はフィラー的な特徴を持っており、発話権交替 (主たる内容を話す発話者の交替) ² にかかわる談話機能を持っているのではないかと述べた。しかし、フィラーといってもその種類は多くあり、具体的にどのフィラーと機能が近いのかといったことはあまり議論されていない。独立用法の対称詞がフィラー的に使用されているのであれば、ほかのフィラーと比較・分析し、その機能や使用実態を明らかにする必要がある。そこで本稿では方言談話を用いて使用されている指示詞系フィラー「アノ」「ソノ」と独立用法の対称詞がどのような機能でどれだけ使用されているかを地点ごとに分類し、各地点におけるフィラー使用の概要を明らかにする。

そして今回方言談話を分析した地点の中から、独立用法の対称詞の存在が複数の先行研究において指摘されている大分県の談話に着目し、談話資料を追加して分析する。(3) は『集成』に収録されている大分県の談話の一部である。大分県ではこのような独立用法の対称詞を多用する傾向があることは先行研究でも指摘されているが、その他のフィラーとの比較や「アノ」「ソノ」の使用実態に関する研究は管見の限りみられない。一般的なフィラーの中でも使用される回数が

² あいづち等の発話は発話権交替とはみなさない。

多いものの1つである「アノ」「ソノ」と比較することによって、大分県におけるフィラー使用の実態を探ることも本稿の目的である。

- (3) B: モー イマー アンタ イエデ センカラ モー ミナ デアイジャーカラナー。(もう今は あなた 家で [結婚式を] しないから もう みんな 出合い [=外で行うこと] だからね。)

(1978年大分県大分郡挾間町の談話・60代女性 『集成』 18: 109)

2. 「アノ」「ソノ」に関する先行研究と分析資料

まず、指示詞系フィラー「アノ」「ソノ」に関する先行研究を概観し、本稿で扱う資料について述べる。

2.1 先行研究

金水・岡崎・曹(2002)では、ア系列の指示詞とソ系列の指示詞は、それぞれ次のように定義されている。

ア系列の指示詞の機能：話し手の過去の記憶から特定の状況を取り出し、そこに含まれる対象を指し示す。

ソ系列の指示詞の機能：I-領域に含まれる対象を指し示す。

I-領域には伝え聞いたことなど間接的に経験した情報が含まれる。つまり、ア系列の指示詞は直接経験した情報、ソ系列の指示詞は伝え聞いたことなど間接的に経験した情報を指し示しているということである。

フィラーの先行研究には山根(2002)、指示詞系フィラーの先行研究は大工原(2008)、小出(2006)など多数ある。そのなかで、本稿は堤(2012)と岩田(2014)を参考にする。

堤(2012)は現代語の指示詞について分析しており、フィラー「アノ」「ソノ」についても言及している。ソノよりもアノが多用されることを示し、ソノの使用率について、「誤解を避けたり、洗練された語彙や表現形式を選択しなければならないなど、慎重な言語編集処理が求められる状況では、ソノの使用率が上昇する」という仮説を立て、「抽象的な話題では、そうでない場合に比べてソノの使用率が上昇する」ことを示した。また、アノ、ソノの違いについて、「アノ・ソノは言語編集という心的操作を行っていることを表す標識であると考えられるが、その編集作業の内容が両者の間で異なっている」としている。

名詞に後続しない感動詞(本稿でいうフィラー)のアノ(一)・ソノ(一)について、漫画や小説の会話文といった、文字化された会話文を分析資料として分析した岩田(2014)では、その機能分類の基準を表1のようにまとめている。そして、アノ(一)・ソノ(一)の比較分析を行い、表2のような結果を導き出している。ここから、岩田(2014: 26-38)は「アノ(一)・ソノ(一)の分布には明らかな偏りがあり、使い分けが行われている」ことを指摘している。一方で「機能

自体にアノ（一）・ソノ（一）の違いがあるわけではなく、分布に偏りがあるだけ」（岩田 2014: 26-38）とも述べている。

表1 機能分類の基準（岩田 2014: 26-38 より）

談話開始前		談話開始後			
①呼びかけ	②談話への 割り込み	談話の流れを変える		談話の流れを変えない	
		③話題転換	④訂正・つっこみ・たしなめ等	⑤言い淀み	⑥言葉探し

表2 アノ（一）・ソノ（一）比較（岩田 2014: 26-38 より）

	①	②	③	④	⑤	⑥
あの	○	○	○	○	○	○
その	×	×	×	×	○	○

前述の通り、岩田（2014）は文字化された会話文を分析資料としている。そこでは表1、2における①～④に該当する「ソノ」の用例はみられなかったということである。①～④の「ソノ」に関して岩田自身で内省もしているが、判定は「？」となっており、「比較すればアノ（一）のほうがすわりがいい」としつつも、「ソノ（一）は絶対に使えないとは言い切れないところがある」と述べている。

以上のことから、先行研究では以下のことが明らかにされているといえる。

- ・「ソノ」よりも「アノ」が多用されていること。
- ・「アノ」は「ソノ」よりも機能が多いこと。
- ・「ソノ」はより良い言葉を選ぶべき場面において使用率が上昇すること。

堤（2012）の分析資料はOPI（外国語の会話能力を測るインタビュー形式のテスト）とテレビ番組であり、いわゆる標準語の会話資料である。そのため示されている結果も標準語の「アノ」「ソノ」の傾向ということになる。本稿では方言談話資料を用いることで、先行研究で明らかにされてきた標準語での傾向と、各地方言の傾向の違いを示す。また、岩田（2014）の分析資料ではみられなかった「ソノ」の機能について、各地方言ではどのような分布になるか実際の談話資料を用いて実態を明らかにする。

2.2 分析資料

指示詞系フィラー「アノ」「ソノ」の収集には「日本語諸方言コーパス（COJADS）」（以下「COJADS」）を用いた。「COJADS」は文化庁が1977～1985年に行った「各地方言収集緊急調査」によって収録された談話データを収録している。ここから、コーパス検索アプリケーション『中納言』を用いて語彙素読み「アノ」「ソノ」を検索し、感動詞-フィラーか連体詞かの分類を筆者が再チェックした。そのうえで、感動詞-フィラーと分類されるものを分析対象とした。また、独立用法の対称詞の収集と談話全体の確認には国立国語研究所（編）『全国方言データベース 日本のふるさとことば集成』（以下『集成』）を用いた。先述の通り「COJADS」の談話データは

「各地方言収集緊急調査」によって収録されたものだが、その一部が『集成』として刊行されている。本稿ではフィラーがあらわれる周辺だけでなく談話全体も分析するために、『集成』にも「COJADS」にも収録されている談話データの部分を使用する。

調査対象地点は岩手県遠野市・東京都台東区・兵庫県相生市・奈良県五條市・山口県豊浦郡豊北町・佐賀県佐賀市・大分県大分郡挾間町である。各地点の話者情報は表3のとおりである。なお、以下では便宜上各都県名のみで呼称する。

この7地点を選択した理由は、首都圏であり、標準語圏である東京都、独立用法の対称詞がみられない東日本の地点である岩手県、独立用法の対称詞が多用される西日本の地点である兵庫県・山口県・大分県と、それぞれを比較しやすい条件が整っていたからである。奈良県・佐賀県は西日本の地点ではあるが、『集成』の談話資料ではあまり独立用法の対称詞が使用されていないため、独立用法の対称詞が多い談話資料との比較対象として選択した。また、話者数が2人もしくは3人であることも理由の1つである。『集成』には話者数が4人以上参加する談話データも存在するが、話者数が多いと談話が煩雑になってしまうためである。

表3 話者情報

地点	収録時間	話者 (生年)	収録年
岩手県遠野市	46分52秒	女性A (1914年)	1980年
		男性B (1917年)	
東京都台東区	34分51秒	男性A (1911年)	1980年
		女性B (1907年)	
兵庫県相生市	30分30秒	男性A (1911年)	1985年
		女性B (1914年)	
奈良県五條市	33分39秒	男性A (1907年)	1981年
		女性B (1923年)	
山口県豊浦郡豊北町	37分09秒	男性A (1911年)	1978年
		女性B (1896年)	
		男性C (1911年)	
佐賀県佐賀市	20分53秒	女性A (1915年)	1978年
		女性B (1902年)	
		男性C (1895年)	
大分県大分郡挾間町 (現・大分県由布市挾間町)	20分58秒	男性A (1906年)	1978年
		女性B (1909年)	
		女性C (1899年)	

2.3 分析方法

「COJADS」および『集成』から収集した「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」を地点別に出現数を整理したうえで、その機能を分類した。機能は岩田(2014)の分類を参考にして、「割り込み」「言い淀み」「埋め草」に分類した。

「割り込み」とはある話者が話しているときに、別の話者が割り込んできた場合をさす。話し手の意見等に反論する場合、話し手の発話を遮った場合などがこれに該当する。岩田(2014)という「①呼びかけ」「②談話への割り込み」、「③話題転換」、「④訂正、つっこみ、たしなめ等」

が該当する。

(4) [Aは婚礼時の新郎新婦入場の思い出を話している]

A: ソーステッガラ ナニガ スッテ ソシテ ヘアーツタンダカ° オラ ッシャネー。
オレア ハー オンモデガラ ヘアーツタスナー, ヌワガラ ヘアタツケナー。(そ
うしてから なにか して そして 入ったもんだか 私は 知らない。私は も
う 表から 入ったしな, 庭から 入ったな。)

B: アノー, ゴシューキ°ノ チュー_nジャサマ(あの ご祝儀の 中座様³[というのは])

A: ウン (うん)

B: ナガナガ モンク ヨグ シャ_nベンダツケモナ。(なかなか 口上 [を] よく 話
すのだったものな。) (『集成』 2: 149 岩手・男性 B アノ・割り込み)

「言い淀み」とは、言いたいことがあるにもかかわらずそれを適切に表現することばが出てこ
ないとき、もしくは品のない内容話すときや、目上に進言するときなど、発言がはばかられる
内容で言い方を考慮しなければならず、より良い言い方を探しているときに用いられる用例であ
る。例えば (5) は「ソノ」に後続する「言い伝え」という言葉がなかなか出て来ず、「エー」や
「ソノ」を用いて場をつなぎ、適切な言葉を探している。岩田 (2014) でいう「⑤言い淀み」「⑥
言葉探し」が該当する。

(5) A: ニホンノ ロクジュエヨシューノ クニク°ニノ エー ソノ イーツタエカ° ナン
カデ カタチニ ノコツタンダロー ト オモーンダヨネ。(日本の 60余州の 国々
の えー その 言い伝えが 何かで 形に 残ったんだろう と 思うんだよね。)
(『集成』 6: 59 東京・男性 A ソノ・言い淀み)

「埋め草」は特に大きな機能がなく、ただ会話をつなぐために使用される用例である。岩田
(2014) は分析対象に書き言葉の会話文を用いることでこれに該当する用例を排除しているため、
該当する分類はない。

(6) (= (3)) B: モー イマー アンタ イエデ センカラ モー ミナ デアイジャーカラ
ナー。(もう 今は あなた 家で [結婚式を] しないから もう みんな
出合い [=外で行うこと] だからね。)
(『集成』 18: 109 大分・女性 B 独立用法の対称詞・埋め草)

このような分類をし、どのフィラーが用いられやすいか、また、どの機能が多く用いられてい
るかを分析する。

³ 中座様とは、婚礼の宴での進行役のことである。

3. 大分県方言に関する先行研究と分析資料

次に、大分県方言に関する先行研究と分析資料について説明する。

3.1 大分県方言に関する先行研究

まずは方言区画についての先行研究を整理する。飯豊・日野・佐藤（編）（1983）によると、九州方言の中で大分方言は「豊日方言」に属する。豊日方言は「福岡県の豊前地区の方言と大分県の豊前・豊後の方言、それに日向宮崎県の大部分を加えた方言」で、現在の大分県は北西部が豊前、それ以外が豊後になるため、全域が豊日方言に区画される。さらに、大分県内における地域差（区画）を「(1) 大分主流方言区域」「(2) 日田・玖珠方言区域」「(3) 東国東方言区域」「(4) 南部海岸方言区域」としている。

大分県内の方言区画に関しては松田正義の区画がある。大分県由布市庄内町方言の文法記述をした松田美香（2017）では松田正義（1991）の「方言区画四区分」を採用している。「方言区画四区分」は大分県内の方言を下図のように「北部方言」「南部方言」「西部方言」「東部方言 A・B」に区分している。

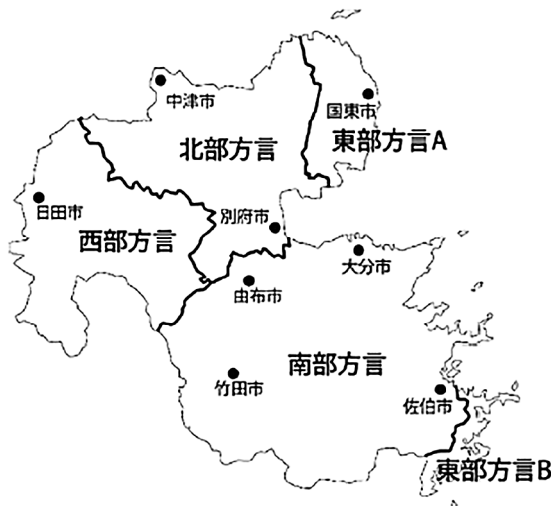


図1 大分県方言区画図
(松田美香 (2017: 143) より抜粋)

松田・日高（1996）ではこれをさらに観点を変えて分割しており、「東部方言域 A」「東部方言域 B」「西部方言域」「南部方言域」「北部方言域」「中部方言域」としている。その中で、中部方言域を「大分共通語」としており、大分県方言の平均的性質を持ち合わせていると述べている。

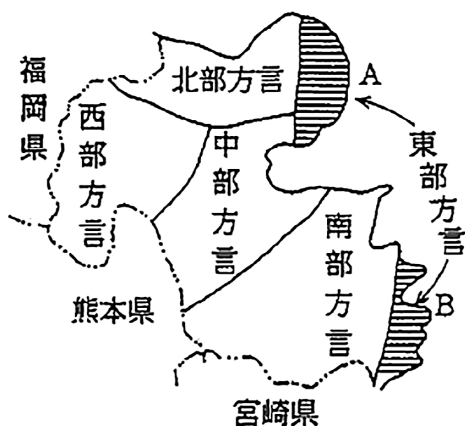


図2 大分県方言区画図 (松田・日高 (1996: 17) より抜粋)

大分県方言の特徴について、飯豊・日野・佐藤 (編) (1983)、松田美香 (2017)、松田・日高 (1996) で共通して述べられているのが「九州色が薄い」ということである。その根拠としては、一般に九州方言の特色とされているカ語尾の形容詞や「バイ」「タイ」「クサ」「バッテン」のような助詞が一部地域を除いて使われないことや、アクセントが東京式アクセントであることが挙げられている (松田・日高 (1996))。九州方言ではなく中国地方や四国地方の方言との共通性があることも共通して言及されている。しかしながら松田・日高 (1996) では九州方言独特の発音や文法の二段活用、語彙などを共有していることから最終的には「しばらく九州方言の中に位置づけておきたい」と述べている。

大分県方言において二人称代名詞 (または二人称代名詞由来の間投詞、文末詞) が頻用されていることは先行研究でも明らかになっている。松田・日高 (1996) では大分県方言において間投詞として使われる二人称代名詞「アンタ」について言及し、「なくても全体の意味に違いはない」が「相手を常に意識し、強調している」のであり、「親しみをこめて呼びかけている」と述べている。また、同著において、「アンタ」また「アンタ」に文末詞「ナー」が付随した「アンタナー」は「敬語である」と述べている。大分県方言において対称詞 (特に二人称代名詞) は対称詞としての機能ではなく間投詞、文末詞 (広くフィラー) としての機能を有しているとみられていることがわかる。この点については松田 (2022) が詳しく述べており、年代差にも言及している。

また「アンタナー」のような二人称代名詞由来の文末詞について藤原 (1986) では「九州方言下には、「アナタ」類のおこなわれることがいちじるしい」と述べられている。実際に『集成』を用いて対称詞の使用量の地域差を分析した山本 (2016) では大分県に限らず九州広域に独立用法の対称詞 (フィラー的に用いられている対称詞) の用例がみられた。大分県方言は「九州色が薄い」と先行研究で述べられていることを先に述べたが、少なくとも対称詞の使用に関してはその他の九州地方と著しくかけ離れてはいないようである。

3.2 大分県方言の分析資料

分析に用いるのは松田・糸井（1993）、松田・日高（1993）に収録されている談話資料で、両者とも大分県各地の談話と、周辺地域である福岡県・宮崎県・熊本県から1地点ずつの談話を、少年層・青年層・壮年層・老年層ごとに収録したもの⁴である。松田・糸井（1993）の収録年は昭和29（1954）～昭和34（1959）年、松田・日高（1993）の収録年は昭和58（1983）～昭和60（1985）年であり、約30年の経年変化をみることもできる。なお、松田・日高（1996）は松田・糸井（1993）、松田・日高（1993）の資料の「解説編」にあたる。談話資料は自由会話と、場面設定の会話（朝の会話・祝儀の会話など）がある。本稿では大分県老年層⁵の自由会話を分析対象とし、松田・糸井（1993）、松田・日高（1993）でそれぞれ12地点分の資料を分析した。詳細な地点についてはのちに示す。

4. 「COJADS」『集成』の分析結果

それぞれの地点のフィルター「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」の出現数を表4にまとめた。なお、（ ）内の数値はその地点での「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」の割合（％）である。これ以降の表に示されている割合は少数点第2位の数値を四捨五入しているため、（ ）内の数値を足しても合計が100にならない場合がある。その場合でも合計欄の割合は100と記載している。

表4 各地点にみられる「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」

地点	収録時間	アノフィルター	ソノフィルター	対称詞	合計
岩手	46分52秒	91 (66.4)	46 (33.6)	—	137 (100)
東京	34分51秒	60 (80.0)	13 (17.3)	2 (2.7)	75 (100)
兵庫	30分30秒	108 (46.8)	108 (46.8)	15 (6.5)	231 (100)
奈良	33分39秒	96 (71.6)	37 (27.6)	1 (0.7)	134 (100)
山口	37分09秒	128 (62.4)	56 (27.3)	21 (10.2)	205 (100)
佐賀	20分53秒	19 (67.9)	4 (14.3)	5 (17.9)	28 (100)
大分	20分58秒	31 (31.6)	9 (9.2)	58 (59.2)	98 (100)

まず「アノ」と「ソノ」の出現数について述べる。岩手県・東京都・奈良県・山口県・大分県・佐賀県の6地点は「ソノ」よりも「アノ」の用例が多かった。堤（2012）においても「ソノ」より「アノ」が使用されやすいとあるので、この6地点の用例の出方は先行研究通りといえよう。それと異なる用例の出方となったのが、兵庫県である。兵庫県は、「アノ」と「ソノ」の用例数

⁴ 地点によっては「老年・壮年の会話」など、複数の年齢層の話者による会話もある。

⁵ 「老年・壮年の会話」など、複数の年齢層の話者による会話の場合は、老年層の発話のみ分析対象とする。

が同等で、しかも多数使用されていた。兵庫県は「ソノ」を多用しているといえるであろう。「アノ」の用例が最も多いのは山口県で、次いで兵庫県が多かった。「アノ」「ソノ」の用例が最も少ないのは佐賀県であった。大分県も用例が少なかった。

そして独立用法の対称詞は、岩手県では用例がみられず、東京都でも 2 例のみであった。西日本においても奈良県と佐賀県は用例がそれぞれ 1 例、5 例と少なかった。兵庫県・山口県・大分県は独立用法の対称詞が一定数あらわれた。特に大分県は 58 例で最も多く、割合でいうと 59.2% であった。大分県では独立用法の対称詞が他のフィラーよりも多く使用されているということになる。それぞれの機能を分類した結果を表 5 に示す。() 内の数値はその地点での機能の割合である。

表 5 各地点の「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」の機能

地点	アノ				ソノ				対称詞				全体に対する割合			
	割り込み	言い淀み	埋め草	合計	割り込み	言い淀み	埋め草	合計	割り込み	言い淀み	埋め草	合計	アノ	ソノ	対称詞	総計
岩手	5 (5.5)	29 (31.9)	57 (62.6)	91 (100)	2 (4.3)	16 (34.8)	28 (60.9)	46 (100)	—	—	—	—	91 (66.4)	46 (33.6)	—	137 (100)
東京	3 (5.0)	44 (73.3)	13 (21.7)	60 (100)	—	13 (100)	—	13 (100)	—	—	2 (100)	2 (100)	60 (80.0)	13 (17.3)	2 (2.7)	75 (100)
兵庫	1 (0.9)	54 (50.0)	53 (49.1)	108 (100)	4 (3.7)	50 (46.3)	54 (50.0)	108 (100)	1 (6.7)	1 (6.7)	13 (86.7)	15 (100)	108 (46.8)	108 (46.8)	15 (6.5)	231 (100)
奈良	—	39 (40.6)	57 (59.4)	96 (100)	—	17 (45.9)	20 (54.1)	37 (100)	—	—	1 (100)	1 (100)	96 (71.6)	37 (27.6)	1 (0.7)	134 (100)
山口	4 (3.1)	41 (32.0)	83 (64.8)	128 (100)	—	26 (46.4)	30 (53.6)	56 (100)	—	6 (28.6)	15 (71.4)	21 (100)	128 (62.4)	56 (27.3)	21 (10.2)	205 (100)
佐賀	2 (10.5)	10 (52.6)	7 (36.8)	19 (100)	—	—	4 (100)	4 (100)	—	—	5 (100)	5 (100)	19 (67.9)	4 (14.3)	5 (17.9)	28 (100)
大分	1 (3.2)	24 (77.4)	6 (19.4)	31 (100)	—	4 (44.4)	5 (55.6)	9 (100)	3 (5.2)	6 (10.3)	49 (84.5)	58 (100)	31 (31.6)	9 (9.2)	58 (59.2)	89 (100)

「アノ」に関しては、奈良県を除く 6 地点ですべての機能に用例がみられた。「言い淀み」は、「エー ナンダ アノ」のように、言いたいことが出てこないとわかる要素が前後に出てくる場合も多かった。また、「割り込み」の用例では「イヤ アノ」のように、否定表現と組み合わせで用いられる場合もあった。表 2 のとおり、岩田 (2014) では「アノ」は「ソノ」よりも多くの機能を持ち汎用的に用いられていることが示されている。表 5 の結果もそれを表しているといえる。奈良県のみ「アノ」の機能で「割り込み」があらわれていないが、奈良県は「ソノ」でも対称詞でも「割り込み」が使用されていない。これは、奈良県の談話において聞き手の話題に割り込むこと自体が少なかったことによるものであると思われる。

「ソノ」に関しては「アノ」よりも機能の使われ方が限定的である地点が多かった。特に注目すべき点は「言い淀み」であろう。標準語圏である東京都では 13 例の用例すべてが「言い淀み」であった。ほかの地点も「埋め草」と同程度使用されていた。「言い淀み」は「ソノ」に特徴的な機能といえよう。岩田 (2014) の分類でも、「ソノ」の機能は「言い淀み」と「言葉探し」に限定されている。つまり「ソノ」は「アノ」に比べて使用される状況が限定されるということである。

ある。その中で、「割り込み」で「ソノ」を用いていたのは岩手県と兵庫県である。特に兵庫県は4例あらわれている。「ソノ」全体の用例数も多いことから、兵庫県では「ソノ」は「アノ」と同等の汎用性を持つと考えられる。

独立用法の対称詞に関しては、その機能のほとんどは「埋め草」であった。その中で、大分県は比較的「割り込み」「言い淀み」にも用例がみられた。山口県は「言い淀み」は一定数みられたが、「割り込み」は用例がみられなかった。

次節では、独立用法の対称詞が比較的多くあらわれている兵庫県・山口県・大分県の談話全体を分析し、話題の内容、談話の特徴などにも注目しつつ、「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」の性質を探る。

4.1 各地点におけるフィラーの状況

本節では各地点における「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」の使用状況を、用例があらわれた前後のみを分析するのではなく、各談話の話題の内容や話者の発話傾向にも着目して分析する。

4.1.1 兵庫県にみられる用例

兵庫県の話題は基本的には子供のころの遊びの話題が長く続き、最後に昔の生活について話題が変わった。また話者同士の関係であるが、どちらも積極的に話し役になろうとする傾向がみられた。あいづちを一度に複数回打つことも特徴的であった。そして、他者の話をすることは比較的少なく、どちらかという自分の体験や意見を話す傾向にあった。

- (7) B: ホイデ アノー ムシロ ヒーテ (それで あのー むしろ [を] 敷いて)
 A: ウン (うん)
 B: カドデー (門の外で)
 A: フン フン (ふん ふん)
 B: ホデ ナツデモ ソーユ, アソビカ° アツタカラ モー, シゼントナー (それで 夏でも そういう, 遊びが あったから もう, 自然とねえ)
 A: ンー (んー)
 B: アノ イマノ コーヨリ, タノシーコト シタナー ユテ ワタシヤ アノ, (あの 今の 子より, 楽しいこと [を] したなあ って 私などは あの,)
 A: ン ソラナー (ん それはねえ)
 B: オモイデカ° アルワナー。(思い出が あるよねえ。)

(『集成』13: 140-141 兵庫・女性 B アノ・1 例目言葉探し・2 例目埋め草)

兵庫県の談話で特徴的であったのは「ソノ」の使用率の高さと機能の汎用性である。ほかの地点は「ソノ」は「アノ」に比べて用例が少なかったが、兵庫県は「アノ」と同等に使用されていた。そして、「割り込み」の機能に関しては、「アノ」は1例、「ソノ」は4例と、「アノ」よりも「ソノ」に用例が多かった。東京都の談話では「ソノ」は「言い淀み」にのみ用いられていたが、

兵庫県は「ソノ」を標準語圏とは異なった用い方をするようである。

(8) [昔の服装の話]

B: セヤカラ タエソーノトキ ソノ フク キタラ エートカナ (だから 体操のとき
[に] その 服 [を] 着たら いいとかね)

A: ン (ん)

B: コー スカートンナ (こう スカートのね)

A: イヤ ソノ ナツモナ (いや その 夏もね)

B: ナツモ (夏も)

A: シャツ*, シャツト (シャツ*, シャツと)

B: ンー ンー ンー (んー んー んー)

A: アノー ズボン, アレワー, ヤッタ。(あの ズボン, あれは, [服] だった。)

B: ナー (なあ)

A: ダエド ヘーゼーノ ソノ ガクセーフク チューノワ モー キタコトナエ。(だ
けど ふだんの その 学生服 というのは もう 着たこと [は] ない。)

(『集成』 13: 184 ページ 兵庫・男性 A ソノ・割り込み)

独立用法の対称詞は 15 例あらわれた。その機能はほとんどが「埋め草」で、「割り込み」と「言い淀み」は 1 例ずつみられた。形式はすべて二人称代名詞であった。兵庫県の談話にみられる対称詞は独立用法以外もすべて二人称代名詞であり、話者同士の親密さがうかがえる。

(9) B: ソヤケド, ソラ ムカシワ アント ヒルカラニナット オーバーサンラカ° ミナ
オテライ マイッテヤデー, (だけど, それは 昔は あなた, 昼からになると
おばあさんたちが みんな お寺に お参りしてだねえ,)

(『集成』 13: 161 兵庫・女性 B 独立用法の対称詞・埋め草)

4.1.2 山口県にみられる用例

山口県の談話は男性話者 A が長年やっていた井戸掘りについての話題、そして米作りなど農業関係の話題であった。基本的には、女性話者 B が男性話者 A に質問し、それに関して A が答える形が多かった。したがって、B は聞き役になることが比較的多くなった。中盤までは A と B の会話で、終盤になってから男性話者 C が加わった。

指示詞系フィラーは「ソノ」よりも「アノ」が多く使用されており、先行研究の内容と大きな差はなかった。

(10) A: アリヤー イツゴロジャッタカイナー。(あれは いつ頃だったかな。)

B: ハー キョネンノ アノー ヨ シガツ。(はあ 去年の あのう × 4月。)

A: ツエカナ。(そうなの。) (『集成』 15: 139 山口・女性 B アノ・言い淀み)

(11) [箱の中で育てた稲の苗(箱苗)の話]

- A: ハー。 ナカナカ ヤッカイナー。(はあ。 なかなか やっかいだよね。)
- B: フーン フーン (ふうん ふうん)
- A: ハコナエアオ ツクルソアー。(箱苗を 作るのは。)
- B: ジャガ シカシ ソノ ヒトハコニーニ ツチガ アー ドノグラエエ ハエエテ
モミガ ドノグラエエ マカレルカ テ ユーン。(だけど しかし その 1箱に
土が ああ どのくらい 入って 糊が どのくらい まかれるか と いうの。)
- (『集成』 15: 177-178 山口・女性 B ソノ・埋め草)

独立用法の対称詞の用例数は、兵庫県より多く大分県より少なかった。機能としては、言い淀みと埋め草の用例がみられた。

- (12) A: ヘテ。 サー イガワ イレルデヨ ッテ ユータ トキニャー アンター バタバ
タ ヘリガ カベ ミナ クエルソジャ。(そして。「さあ 井戸の内側の囲い[を]
入れるよ」と 言った 時には あなた バタバタ [と] 縁が 壁 [が] みんな
崩れるんだ。)
- (『集成』 15: 168 山口・男性 A 独立用法の対称詞・埋め草)

4.1.3 大分県にみられる用例

大分県の談話は結婚式や季節行事など、昔の風習についての話題が多かった。その中で、昔と現在の比較が行われることが度々みられた。これは兵庫県と共通する点である。また、自分以外の他者の話題に言及することも少なかった。

主な発話者は男性話者 A と女性話者 C であるが、この二人が発話権を争うような場面もみられた。(13) では男性話者 A が主な発話者であるが、「ホイテ アサ アンター」と、あきらかに男性話者 A の発話内容が終わっていないにもかかわらず女性話者 C が「ホンゼンジャロー」と割って入ってきている。男性話者 A がそのまま発話権を保持し続けたため女性話者 C には発話権が渡らなかったが、この場面では女性話者 C が男性話者 A から発話権を奪いに行ったと考えられる。

- (13) A: アントキチャー アンター ワシドーガー ワケー トキニャー アンター, オヒマ
サマチャー チット トマリヨッタ。(あの時は あなた 私たちが 若い 時には
あなた, お日待ち様という と 必ず 泊まっていた。)
- C: アー トマリヨッタ。(ああ 泊まっていた。)
- A: ミーンナガ ソン イエニナ。(全員が その 家にね。)
- C: ウーン ソー (うん そう)
- A: ホイテ アサ アンター (そして 朝 [に] あなた)
- C: ホンゼンジャロー。(本膳だろう。)
- A: ホンデン。(本膳。)
- C: ウン (ウン)

- A: ホンデンヌ ソナエチナー。(本膳を 供えてね。)
- C: ソー ソー (そう そう)
- A: ホイテ オクルトナー, コンダ カオー アラウニ アンター ソコンシガ, オーケナ アラー チョーダレーチ イーヨツタンジャ。コイツグライナ センメンキナー。(そして 起きるとね, 今度は 顔を 洗うのに あなた その[家の]人が, 大きな あれは 手水だらいと 言っていたのだ。このくらいの 洗面器ね。)
- C: {笑}
- A: オケジ トククッタ。アンヤチー シュー コーンダ トウカミクージナ。(桶で作った。あいつに 塩を 今度は つかみこんでね。)
- C: ソー (そう)
- A: ホイテ シオミズー トククッチ。(そして 塩水を 作って。)
- C: フン (うん)
- A: ホイチ オマエ ソレジ ズート ミナ カオ アラウノジャ。シオミズ イレタヤトウ。(そして あなた それで ずっと みんな 顔[を] 洗うのだ。塩水[を] 入れた やつ [で]。)

(『集成』 18: 144-146 大分・男性話者 A 独立用法の対称詞・すべて埋め草)

また、大分で時折見受けられたのが「アンタ アノ」というように、独立用法の二人称代名詞とフィラーの「アノ」が同時にあらわれることであった。「アンタ」は「埋め草」で、「アノ」は「言い淀み」ではないかと考えられる。つまり、「アンタ」で聞き手に注目させておいて、「アノ」で実際に発言する言葉を探すという具合である。

- (14) C: オトッコワ アンタ アンー, ポケットニ フクノ ポケットニ イレチョッチ。(男の子は あなた あの, ポケットに 服の ポケットに 入れている。)

(『集成』 18: 168 大分・女性 C 独立用法の対称詞・アノ・言葉探し)

首都圏と大分県の談話を比較して「アンタ」「オマエ」のフィラー的使用(本稿でいう独立用法の対称詞)について分析した松田(2015)では、「[「アンタ」「オマエ」はフィラーの機能のうち対人関係に係わる機能, その中でも話し手の「自分の情報に対しての心的態度を表す」と「発話権保持」が認められるであろう」とある。これは本稿での分析に用いた資料でも同様であった。さらに、表4のとおり「アノ」「ソノ」よりも用例が多いことから、大分県では独立用法の対称詞は一般的に用いられるフィラーであり、少なくとも「埋め草」の機能においては指示詞系フィラーよりも多用されるフィラーであると考えられる。

4.2 考察

ここで指示詞系フィラー「アノ」「ソノ」と独立用法の対称詞との関連について述べておきたい。フィラーの出現数は「アノ」が「ソノ」より出現数が多い地点がほとんどであったが、兵庫県の

み「ソノ」が「アノ」と同数使用されていた。標準語を分析対象とした先行研究では「ソノ」より「アノ」が使われやすいとしているものが多かった。たとえば、2つのテレビ番組の出演者の「アノ」「ソノ」の使用を調査した堤（2012）では、2つの番組を合わせて「アノ」が533例、「ソノ」が112例であった。堤（2012）は時事問題を扱うような番組と日常の出来事をリラックスして話す番組を比較しており、時事問題を扱うような番組のほうが「ソノ」の使用率が高いとしている。そしてそれは「より慎重に語彙・表現形式を選択している」からであると説明している。この時使用される「ソノ」は、岩田（2014）の分類でいう⑤言い淀み、⑥言葉探し、本稿でいう「言い淀み」で説明できるだろう。

各地点において、「ソノ」で用いられる機能は「埋め草」「言い淀み」がほとんどで、東京都の場合は「言い淀み」のみであった。そして「アノ」よりも用例数が少なかった。例外は兵庫県である。兵庫県は先述の通り「ソノ」の用例数が多く、機能も汎用性が比較的高かった。そして、兵庫県ではどのような場面で用いられるかということ（15）のように発話権が奪われそうな場面であった。

(15) [昔の遊びの話題で]

B: デンシンボー ユテナ。(デンシンボー [と] 行ってね。)

A: ンー ソー ソー ソー (んー そうそうそう)

B: ハシリョッテン。(走っていたの。)

A: ンー ワシラモ ソノー オンミャノ ケーダイテナ。(んー 私たちも その お宮の境内でね。)

B: ウン ンー (うん んー)

A: ホテ トリートカ ヘカラ ソノー。(そして 鳥居とか それから その。)

B: フン (ふん) (『集成』13:158 兵庫・男性 A ソノ・埋め草)

ここから、兵庫県においては話者同士が発話権を奪い合うような談話では「ソノ」の使用が上昇すると考えられ、発話権を維持する場つなぎ、もしくは発話権を奪取するための呼び水としての意味合いが含まれていると考えられる。兵庫県では独立用法の対称詞も多用されるが、独立用法の対称詞と「ソノ」は兵庫県の談話において発話権の維持、獲得に関連する機能を持っていると考えられる。その中でも「ソノ」は「割り込み」に用例が複数みられることから発話権の獲得にも関連し、独立用法の対称詞は「埋め草」が多いことから発話権の維持に特にかかわると考えられる。

大分県の談話で特徴的であるのは「アノ」「ソノ」の出現数の少なさである。大分県は兵庫県と同じく独立用法の対称詞を多用する地点であるが、「ソノ」の出現数は7地点中佐賀について少なかった。むしろ指示詞系フィラーよりも独立用法の対称詞を多用していた。兵庫県の「ソノ」は発話権を奪い合うような場面で特に使用されていたが、大分県の談話において、そのような場面で使用されているものは独立用法の対称詞であった。大分県は、同じ独立用法の対称詞を使用する地点でも特にそれらの使用が浸透しており、発話権を争う場面では独立用法の対称詞を使用

するのではないだろうか。「ソノ」の使用数が少ないことも、独立用法の対称詞が「ソノ」と同じ機能を持つため淘汰されたと考えれば説明がつく。大分県における独立用法の対称詞は、すでに対称詞の枠から離れ、フィルターとして確立していると考えられる。

5. 大分県方言の談話資料の分析結果

本節では松田・糸井（1993）、松田・日高（1993）に収録されている大分県方言の談話資料を分析した結果を示す。分析対象のそれぞれの出現数は以下の表6、7のとおりである。

各地点の自由会話は『集成』の談話に比べると短いため、すべての自由会話にあらわれた用例を合計した総数（総計）をみると、表6は「アノ」と「ソノ」がそれぞれ24例であるのに対し、独立用法の対称詞は81例と、全体の半数以上を占めた。『集成』と同じく、指示詞系フィルターよりも独立用法の対称詞が多用されているという結果になった。また、表7は「アノ」が66例、「ソノ」が21例と、「アノ」「ソノ」の総数には差がしたが、独立用法の対称詞が144例と最も多いことは表6の結果と同様であった。

全体の出現数における独立用法の対称詞出現割合をみると表6は62.8%、表7は62.3%ということではほぼ同じ割合となっている。これらの結果から、大分県はどの資料をみても独立用法の対称詞を多用していることがわかる。

表6 松田・糸井（1993）の分析結果 () 内は割合 (%) を示す

地点	アノ	ソノ	対称詞	合計
東国東郡国東町	—	4 (25.0)	12 (75.0)	16 (100)
東国東郡姫島村	1 (25.0)	—	3 (75.0)	4 (100)
津久見市保戸島	—	—	3 (100)	3 (100)
南海部郡宇目村木浦	—	1 (100)	—	1 (100)
大野郡緒方町長谷川	1 (16.7)	3 (50.0)	2 (33.3)	6 (100)
大分郡大南町戸次	2 (18.2)	—	9 (81.8)	11 (100)
玖珠郡九重町飯田	4 (19.0)	1 (4.8)	16 (76.2)	21 (100)
日田郡中津江町間地	—	5 (45.5)	6 (54.5)	11 (100)
下毛郡耶馬溪村家籠	11 (52.4)	8 (38.1)	2 (9.5)	21 (100)
豊後高田市呉崎	3 (75.0)	—	1 (25.0)	4 (100)
速水郡山香町中山香	—	—	22 (100)	22 (100)
西国東郡真玉町上真玉	2 (22.2)	2 (22.2)	5 (55.6)	9 (100)
総計	24 (18.6)	24 (18.6)	81 (62.8)	129 (100)

表7 松田・日高 (1993) の分析結果 () 内は割合 (%) を示す

地点	アノ	ソノ	対称詞	合計
東国東郡国東町	5 (22.7)	—	17 (77.3)	22 (100)
東国東郡姫島村	—	—	8 (100)	8 (100)
津久見市保戸島	6 (35.3)	—	11 (64.7)	17 (100)
南海部郡鶴見町大島	1 (10.0)	2 (20.0)	7 (70.0)	10 (100)
南海部郡宇目村木浦	4 (33.3)	1 (8.3)	7 (58.3)	12 (100)
大野郡緒方町長谷川	2 (15.4)	7 (53.8)	4 (30.8)	13 (100)
大分郡大南町戸次	5 (22.7)	—	17 (77.3)	22 (100)
北海部郡佐賀関町一尺屋	9 (56.3)	—	7 (43.8)	16 (100)
下毛郡耶馬溪町家籠	14 (38.9)	6 (16.7)	16 (44.4)	36 (100)
中津市北部	17 (53.1)	4 (12.5)	11 (34.4)	32 (100)
豊後高田市呉崎	—	1 (5.3)	18 (94.7)	19 (100)
西国東郡真玉町上真玉	3 (12.5)	—	21 (87.5)	24 (100)
総計	66 (28.6)	21 (9.1)	144 (62.3)	231 (100)

次に、それぞれの機能を分類した結果を表8、表9に示す。() 内の数値はその地点での機能の割合である。表8は松田・糸井 (1993)、表9は松田・日高 (1993) の結果である。

表8の「総計」をみると、「アノ」はすべての機能に用例があり、「言い淀み」の用例が最も多いこと、「ソノ」に「割り込み」の用例がないこと、独立用法の対称詞はすべての機能に用例があり、「埋め草」の用例が最も多いことがわかる。

表8 大分県各地における「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」の機能 (松田・糸井 1993)

地点	アノ				ソノ				対称詞			
	割り込み	言い淀み	埋め草	合計	割り込み	言い淀み	埋め草	合計	割り込み	言い淀み	埋め草	合計
東国東郡国東町	—	—	—	—	—	4 (100)	—	4 (100)	—	1 (8.3)	11 (91.7)	12 (100)
東国東郡姫島村	—	1 (100)	—	1 (100)	—	—	—	—	—	—	3 (100)	3 (100)
津久見市保戸島	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3 (100)	3 (100)
南海部郡宇目村木浦	—	—	—	—	—	—	1 (100)	1 (100)	—	—	—	—
大野郡緒方町長谷川	—	—	1 (100)	1 (100)	—	2 (66.7)	1 (33.3)	3 (100)	—	—	2 (100)	2 (100)
大分郡大南町戸次	1 (50.0)	1 (50.0)	—	2 (100)	—	—	—	—	—	—	9 (100)	9 (100)
玖珠郡九重町飯田	2 (50.0)	—	2 (50.0)	4 (100)	—	—	1 (100)	1 (100)	1 (6.3)	—	15 (93.8)	16 (100)
日田郡中津江町間地	—	—	—	—	—	2 (40.0)	3 (60.0)	5 (100)	—	—	6 (100)	6 (100)
下毛郡耶馬溪村家籠	—	10 (90.9)	1 (9.1)	11 (100)	—	8 (100)	—	8 (100)	—	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (100)
豊後高田市呉崎	—	3 (100)	—	3 (100)	—	—	—	—	—	1 (100)	—	1 (100)
速水郡山香町中山香	—	—	—	—	—	—	—	—	1 (4.5)	2 (9.1)	19 (86.4)	22 (100)
西国東郡真玉町上真玉	—	2 (100)	—	2 (100)	—	2 (100)	—	2 (100)	—	1 (20.0)	4 (80.0)	5 (100)
総計	3 (12.5)	17 (70.8)	4 (16.7)	24 (100)	—	18 (75.0)	6 (25.0)	24 (100)	2 (2.5)	6 (7.4)	73 (90.1)	81 (100)

そして表9をみると、表8とおおむね同様の傾向がみられる。ただ使用数に関しては差異が生じており、表9では表8に比べて「言い淀み」における「アノ」の使用が増えている。表9のこの特徴は『集成』の大分県の談話でみられた特徴と合致するものである。松田・糸井(1993)(表8)の資料は1954～1959年に収録されたもので、『集成』(1978)、松田・日高(1993)(表9)と比べると最大で31年時間が経過している。これは、大分県において独立用法の対称詞の機能が経年変化した可能性を示唆している。大分県方言では、1980年代にさしかかる頃には「言い淀み」の機能では「アノ」を使用することが増え、独立用法の対称詞は主に「埋め草」の機能において使用される傾向があるが、1950年代においては独立用法の対称詞が指示詞系フィラーよりも汎用的なフィラーであったと考えられる。

表9 大分県各地における「アノ」「ソノ」「独立用法の対称詞」の機能 (松田・日高 1993)

地点	アノ				ソノ				対称詞			
	割り 込み	言い 淀み	埋め 草	合計	割り 込み	言い 淀み	埋め 草	合計	割り 込み	言い 淀み	埋め 草	合計
東国東郡国東町	—	5 (100)	—	5 (100)	—	—	—	—	—	3 (17.6)	14 (82.4)	17 (100)
東国東郡姫島村	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1 (12.5)	7 (87.5)	8 (100)
津久見市保戸島	2 (33.3)	3 (50.0)	1 (16.7)	6 (100)	—	—	—	—	—	1 (9.1)	10 (90.9)	11 (100)
南海部郡鶴見町大島	—	1 (100)	—	1 (100)	—	2 (100)	—	2 (100)	2 (28.6)	—	5 (71.4)	7 (100)
南海部郡宇目村木浦	—	4 (100)	—	4 (100)	—	—	1 (100)	1 (100)	—	—	7 (100)	7 (100)
大野郡緒方町長谷川	—	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (100)	—	7 (100)	—	7 (100)	—	—	4 (100)	4 (100)
大分郡大南町戸次	—	5 (100)	—	5 (100)	—	—	—	—	—	—	17 (100)	17 (100)
北海部郡佐賀岡町一尺屋	—	7 (77.8)	2 (22.2)	9 (100)	—	—	—	—	—	—	7 (100)	7 (100)
下毛郡耶馬溪町家籠	—	10 (71.4)	4 (28.6)	14 (100)	—	1 (16.7)	5 (83.3)	6 (100)	2 (12.5)	—	14 (87.5)	16 (100)
中津市北部	1 (5.6)	15 (83.3)	2 (11.1)	18 (100)	—	4 (100)	—	4 (100)	—	—	11 (100)	11 (100)
豊後高田市呉崎	—	—	—	—	—	1 (100)	—	1 (100)	—	1 (5.6)	17 (94.4)	18 (100)
西国東郡真玉町上真玉	—	3 (100)	—	3 (100)	—	—	—	—	1 (4.8)	3 (14.3)	17 (81.0)	21 (100)
総計	3 (4.5)	54 (80.6)	10 (14.9)	67 (100)	—	15 (71.4)	6 (28.6)	21 (100)	5 (3.5)	9 (6.3)	130 (90.3)	144 (100)

地点別に使用状況をみると、表8の下毛郡耶馬溪村家籠などの地点は独立用法の対称詞よりも指示詞系フィルターが多くあらわれている。そういった地点の話題は、歌を歌っている、年下の話者が質問し、年上の話者がそれに対して回答する、というようなものであった。

(16) F: ソン X⁶ チュウ ドーユー リクッソ イエジャロカ (その X というのは どういう いわれの 家だろうか)

M: X チュウ アノ ダイタイ ソリヤ オドーム ソノ ムカシカラ ソノ マー
ダイタイ イエガラガ ヨカッチェノー (X というのはね あの だいたい それは
おれたちも その 昔から その まあ 家柄が よくってねえ)

(松田・糸井 (1993: 285) 下毛郡耶馬溪村家籠の談話・すべて言い淀み)

(17) F: ハイ ホンナー ウトーテ ミロー。 ヒョーシトッテ… (はい それじゃ 歌って
みよう。 拍子とって…)

M: ハイ (はい)

F: 〈歌〉 ヤーレ キョーモ コチコチ マタ アスモ コチヨ (やあれ きょうも 東

⁶ X は人名 (家名) である。本文中では実名で記載されているが、ここでは伏せて記載する。

風東風 また あすも 東風よ) (松田・糸井 (1993: 346) 豊後高田市呉崎の談話)

(16) はその土地の名家について年下の F が質問し、年上の M が記憶を頼りにそれにこたえている。また、(17) は当たり障りのない会話が続いた後、歌を歌ってほしいと頼まれた F が歌いだす場面である。(16)、(17) に共通していることは、あまり会話が盛り上がっていない点である。

大分県と同じく独立用法の対称詞を多用する兵庫県相生市の談話を用いて独立用法の対称詞があらわれる談話の特徴について分析した山本 (2015) では、話者がどちらも興味があり、積極的に会話に参加しようとしている話題、もしくは話し手が聞き手に強く訴えかけたい話題の時に用例が多くみられ、反対に、会話が盛り上がっておらず、とぎれがちな場面や、事実をもとに淡々と話すような場面では用例がみられなかったことを示した。大分県も同じように、あまり会話が弾んでいない場面では独立用法の対称詞の使用が減少するのではないだろうか。

表 9 においては、大野郡緒方町長谷川 (以下緒方町)、北海部郡佐賀関町一尺屋 (以下佐賀関町)、中津市北部 (以下中津市) の 3 地点が、独立用法の対称詞よりも指示詞系ファイラーのどちらかが多くあらわれている。緒方町は「ソノ」が最も多く出現しており、昔体験した出来事を思い出すときに用例が集中していた。具体的な内容としては学校 (おそらく尋常高等小学校) 卒業後すぐに父親の仕事の手伝いをしていたという内容で、思い出すということに加えてより良い言い方を探っていたと考えられる。

- (18) M: アー。 マー アンマリ ムカシバナシ ミタイナコタ デケンケドナー。(ああ。
まあ あんまり 昔話 みたいなことは できないけどなあ。)
- F: ンー (うん)
- M: マ ダイタイ ソノ アレー ショーワキューネンニナ、(まあ 大体 その 昭和 9 年にな、)
- F: ンー (うん)
- M: ガッコー ソトゥギョーシタンジャ。(学校を 卒業したんだ。)
- F: フン (うん)
- M: ソレカリ ソノ シトオ ヤトータンジャンナー、(それから その 他人を 雇ったんではなあ、)
- F: フン (うん)
- M: オヤジモー ソノ ナカナカー トノ、ヤッパー モーケキランモンジャキー
(親父も その なかなか、そのう やっぱり 儲けることができないから)
- F: フン (うん)
- M: オレダチ モー ソノ ガッコーニャ ヤランジェー (俺たち もう その 学校に やらずに)
- F: フン (うん)
- M: モー コー ソトゥギョーシナリー モー ソノ ナンジャー テットイ チュー

コトジナー、(もう こう 卒業するとすぐ もう その なんだ 手伝い という
ことだな、)

F:アー (ああ)

M:ソレカリー ナンジャー コメウシユー ウマンシエナケー トウケチ シタンジャ
ガエー。(それから 何だ 荷物を 馬の背中に つけて したんだよ。)

(松田・日高 (1993: 160) 大野郡緒方町長谷川の談話・すべて言い淀み)

佐賀関町は昔起こった出来事を思い出しているときに「アノ」が多く出現し、自身の心情を吐露している場面で独立用法の対称詞があらわれた。この傾向は緒方町も同様で、淡々と話すときは独立用法の対称詞が出にくく、強く訴えかけたい話題のときに出やすい傾向がここでも確認された。

(19) F:オドーガ コドモントキニャーノー、アノー コドオモ ジューイチニンキョーダ
イジェ、モ コドモオ ヨネンシエイ カカラ ガッコーニ オウーテ イキヨッタ
ンジャーガ。(私たちが 子供の時にはねえ、 あのう 子供を 11人兄弟で、 もう
子供を 4年生に になると 学校に 背負って 行っていたもんだっだよ。)

(松田・日高 (1993: 208) 北海道郡佐賀関町一尺屋の談話・言い淀み)

(20) M:ジャーキーノー (だからなあ)

F:ウーン (うん)

M:オマエ、ナンボシタチェオマ、ムカシシガ アタマガ イーカエノー。(中略)モー
オマエ ホラ シゴトシー シゴトシー バーツカリ (お前、いくらしたっておまえ、
昔 [の] 人が 頭が いいかなあ [いいわけないよ]。 (中略) もうお前 ほら 仕事
をしろ 仕事をしると ばかり)

(松田・日高 (1993: 209) 北海道郡佐賀関町一尺屋の談話・すべて埋め草)

上記2地点は、全体的にあまり話題が盛り上がっているわけではなかったために、独立用法の対称詞が少なかったのではないかと考えられる。よって、表8の指示詞系フィラーが独立用法の対称詞よりも多くあらわれた地点と同様の傾向があると考えられる。

中津市は全体的にまんべんなく指示詞系フィラー「アノ」と独立用法の対称詞があらわれており、あまり偏りがなかった。「アノ」は単純な言い淀みで、「ソノ」ははっきりとしたことが言いにくい話題(お金が絡む話)でみられた。

(21) F:ウーン モー コンノゴロ アーン ナンボカ ヒダガ イトナッター。(うん も
う このごろ あの いくらか 膝が 痛くなった。)

(松田・日高 (1993: 394) 中津市北部の談話・言い淀み)

(22) [Mの家が立派だとFに言われて]

M:アノナー (あのなあ)

F:ウーン (うん)

M: コドモガ ソナー (子供が その)

F: アー (ああ)

M: アナー (あの)

F: アー (ああ)

M: ムゲノージモッテナー。(かわいそうでなあ。)

(松田・日高 (1993: 397) 中津市北部の談話・1 例目割り込み・その他は言い淀み)

独立用法の対称詞の出方としては 4.1.3 で分析した結果と同様に、「アノ」と同時に用いられる傾向がみられた。「アノ」と独立用法の対称詞の用例数にさほど差がなかったのはこのことが影響したのではないかと考えられる。

(23) M: ドイッショールーアスター アン ヒャクショーワー マダ ションノー。(どうしてるあんた あの 百姓は まだしよるの。)

(松田・日高 (1993: 394) 中津市北部の談話・1 例目埋め草・2 例目言い淀み)

6. 考察

以上、方言談話資料を用いて独立用法の対称詞と指示詞系フィラー「アノ」「ソノ」を分析した。標準語を分析対象とした堤 (2012) 等の先行研究では「ソノ」より「アノ」が使われやすいとしているものが多く、本稿の分析でも多くの地点が同様の傾向を示したが、兵庫県は「アノ」と「ソノ」の用例数が同数あられ、「ソノ」の談話機能も比較的汎用性が高かった。そして、兵庫県では「ソノ」がどのような場面で用いられるかという発話権が奪われそうな場面であった。ここから、兵庫県においては話者同士が発話権を奪い合うような談話では「ソノ」の使用が上昇すると考えられた。大分県は指示詞系フィラーよりも独立用法の対称詞を多用していた。また、発話権を奪い合うような場面では独立用法の対称詞を使用していた。大分県は、同じ独立用法の対称詞を使用する地点でも特にそれらの使用が浸透しており、その結果指示詞系フィラーよりも使用されているのではないだろうか。2018 年に大分県で筆者が実施した独立用法の対称詞に関する言語意識調査⁷では、被調査者は「普段からよく使用する」と回答している。同じ調査を 2015～2016 年にかけて、兵庫県⁸でも実施したが、独立用法の対称詞を多用しているにもかかわらず「自分は使用しないが他者がよく使用している」という意識の話者もみられた。この 2 つの調査結果を整理したものが表 10 である。話者の意識の点においても、大分県は独立用法の対称詞が浸透していると考えられる。

⁷ 当時 80 代前半の男性と、70 代後半の女性各 1 名ずつに実施した。

⁸ 50 代後半～80 代前半の男女計 7 名に実施した。

表 10 対称詞に関する話者の使用意識と実際の使用状況⁹

地点	話者	性別	生年	言語形成期の居住地	使う相手	使用できる対称詞の形式					独立用法の対称詞を自分が使用している意識があるか	実際に使用しているか
						アナタ	アンタ	オマエ	オマハン	キミ		
大分	A	男	1935	由布市	目上	×	○	×	—	×	○	○
					同等	×	○	○	—	×		
					目下	×	○	○	—	×		
	B	女	1939	由布市	目上	×	△	×	—	×	○	○
					同等	×	○	×	—	×		
					目下	×	○	×	—	×		
兵庫	C	女	1934	相生市	目上	×	△	×	—	×	☆	○
					同等	×	○	×	—	×		
					目下	×	○	×	—	×		
	D	男	1942	相生市	目上	×	×	×	×	×	☆	—
					同等	×	×	○	○	×		
					目下	×	×	○	×	×		
	E	女	1944	相生市	目上	○	×	×	—	×	×	○
					同等	×	○	×	—	×		
					目下	×	×	×	—	×		
	F	女	1944	たつの市	目上	×	×	×	—	×	×	○
					同等	×	○	×	—	×		
					目下	×	○	×	—	×		
	G	男	1947	相生市	目上	×	○	○	×	×	○	○
					同等	×	○	○	×	×		
					目下	×	○	○	×	×		
	H	男	1951	相生市	目上	○	×	×	—	×	×	○
					同等	×	○	×	—	×		
					目下	×	×	×	—	△		
	I	女	1958	相生市	目上	—	×	×	×	×	☆	○
					同等	—	○	×	×	×		
					目下	—	○	△	×	×		

○：使用する ×：使用しない △：曖昧な回答（使うかもしれない、わからない等）

☆：違和感はない（自分が使うかどうかは言及がなかった） —：不明

7. おわりに

本稿では方言談話にみられる指示詞系フィラー「アノ」「ソノ」と独立用法の対称詞を比較することでフィラーの用いられ方の差異を分析した。先行研究で明らかにされている、いわゆる標準語的なフィラーの使用とは異なった地点がみられ、それらは独立用法の対称詞を多用する地点であった。ここから、独立語的な対称詞は単にその地点に存在するだけでなく、ほかのフィラーの使用にも影響を与えていることがわかった。他方言では汎用的に用いられている指示詞系フィラー「アノ」の機能が、大分県方言では制限されていた。ただ、この傾向は年代が新しくなると

⁹ 対称詞の形式は全員が「使わない」と回答した形式は掲載していない。また、地点や調査実施年度によって調査内容が若干異なっているため、「不明」となっている項目がある。

薄れてきており、独立用法の対称詞の機能は「埋め草」に偏り、「言い淀み」は「アノ」が担う傾向がみられた。ここから、経年変化の可能性があることも示唆された。

参考文献

- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）（1983）『講座方言学 9 九州地方の方言』東京：国書刊行会。
- 岩田一成（2014）「指示詞から感動詞へ—アノ（一）・ソノ（一）について—」『山口国文』37: 26-38.
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚（2002）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究 日本語・韓国語・トルコ語」生越直樹（編）『シリーズ言語学 4 対照言語学』217-247. 東京：東京大学出版会。
- 小出慶一（2006）「フィラー「このー」「そのー」「あのー」について：その由来、機能、相互関係」『埼玉大学紀要 教養学部』42(2): 15-27.
- 国立国語研究所（編）（2001～2008）『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全20巻。東京：国書刊行会。
- 大工原勇人（2008）「指示詞系フィラー「あの（一）」・「その（一）」の用法」『日本語教育』138: 53-62.
- 堤良一（2012）『現代日本語指示詞の総合的研究』東京：ココ出版。
- 藤原与一（1986）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究 下』東京：春陽堂書店。
- 松田正義（1991）「大分方言の区画」大分県総務部総務課（編）『大分県史 方言篇』第1章第2節「方言区画」33-42. 大分県。
- 松田正義・糸井寛一（1993）『方言生活 30年の変容 上』東京：桜楓社。
- 松田正義・日高貢一郎（1993）『方言生活 30年の変容 下』東京：桜楓社。
- 松田正義・日高貢一郎（1996）『大分方言 30年の変容』東京：明治書院。
- 松田美香（2015）「大分と首都圏の依頼談話—大分方言の「アンタ」「オマエ」のフィラーの使用について—」『別府大学紀要』56: 11-22.
- 松田美香（2017）「大分県由布市庄内町方言」方言文法研究会（編）『全国方言文法辞典資料集（3）活用体系（2）』143-153.
- 松田美香（2022）「フィラー的な感動詞の用法—大分方言のアンタを中心に—」日本方言研究会（編）『方言の研究』8: 139-159. 東京：ひつじ書房。
- 山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』東京：くろしお出版。
- 山本空（2014）「方言談話における二人称代名詞の談話機能」『日本方言研究会 第99回研究発表会発表原稿集』9-16. 日本方言研究会。
- 山本空（2015）「相生市方言における省略可能な対称詞とその出現条件」『千里山文学論集』94: 19-38. 関西大学大学院文学研究科。
- 山本空（2016）「方言談話における対称詞の使用量の地域差」『国文学』100: 466-482. 関西大学国文学会。
- 山本空（2021a）『対称詞の談話機能に関する対照方言学的研究』博士論文、関西大学。
- 山本空（2021b）「方言談話における対称詞と指示詞系フィラー—大分県の談話を中心に—」『日本語学会 2021年度春季大会予稿集』85-90.

関連 Web サイト

「日本語諸方言コーパス (COJADS)」データベース 2019.05 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/cojads/search> (2020年8月26日確認)

Japanese Filler “*ano*” and “*sono*” and Second-Person Pronouns in Japanese Dialects: Using COJADS and Dialectal Daily Conversational Data from Oita Prefecture

YAMAMOTO Sora

Kindai University Technical College / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

Using the Zenkoku Hougendanwa Database [Japanese Dialect Database] and the corpus of various Japanese dialects “COJADS,” we investigated the symmetry of independent languages. We compared and analyzed the actual usage of the demonstrative fillers “*ano*” and “*sono*” for each location. As a result, the use of demonstrative fillers was found to be different from the use of standard words among the points where independent-language symmetrical words were frequently used. This was particularly notable in Oita Prefecture, where demonstrative fillers were rarely used, while independent symmetrical verbs were used the most.

Therefore, when we conducted a survey of Oita Prefecture by adding colloquial materials, we found that there were many sites that used independent-language symmetrical words rather than demonstrative fillers. It is thought that symmetrical words are used as fillers on a daily basis in Oita prefecture. In this way, independent symmetrical verbs not only exist at that point, but also affect the use of other fillers. However, this tendency faded over time, suggesting the possibility of secular change.

Keywords: dialectal discourse, second-person pronouns, filler, COJADS